その後、中小の豪族(ごうぞく)たちは、自分の支配地を広げようとお互いにいろいろな約束を結んだり、あるいは争ったりしていました。

その中で、三春田村氏はだんだん大きな力をもつようになりました。

1504年、田村義顕(よしあき)は、田村地方を支配するために本きょ地を三春城に移したと伝えられています。

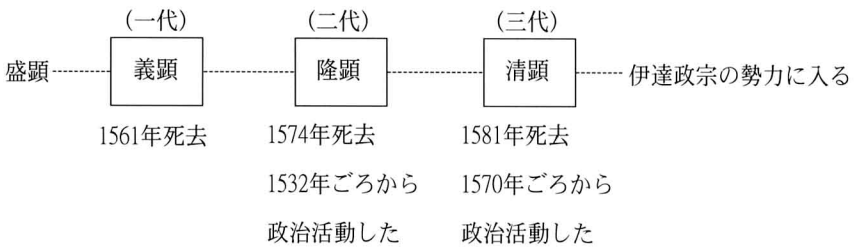
三春は田村地方で重要な交通の要所になっていたため、ここに城を移したと考えられます。

三春は、義顕(よしあき)、隆顕(たかあき)、清顕(きよあき)と3代にわたって、約80年間、城下町として栄えました。清顕の娘「愛姫(めごひめ)」は、戦国大名として名高い伊達政宗(だてまさむね)のもとにとつぎました。

三春田村氏は、お寺や神社を三春に移し、三春を支配することを人々に認めさせるとともに、信こうによって人の心をひきつけようとしました。

今の郡山の守山にある山中から、田村地方の守り神であった「大元帥明王社(たいげんみょうおうしゃ)」を移して三春におまつりしました。

また、田村氏のぼだい寺として、今の郡山市富久山町の福原から福聚寺(ふくじゅうじ)を移しました。

神社やお寺を移すと、守山や福原から移り住む人々がふえ人口も多くなったことが想像されます。

数多くの戦いに勝って、領地をたくさん増やすこともできましたが、清顕がなくなると、田村氏の三春支配も終わりになりました。